

音楽表現における和太鼓の活用について

— 演奏技術その求めるものの違い —

井 中 あけみ

本研究では、保育者・幼稚園教諭養成における音楽表現のあり方を考えるため、豊橋創造大学短期大学部幼児教育・保育科2年生の学生を対象に、合奏合唱を通じた音楽表現活動を実施した。テーマは「歌い継いでいきたいうた」とし、「わらべうた」による2部合唱や楽器演奏、和太鼓によるリズム合奏などの発表を行った。

保育者を目指す学生たちが、集団の音楽表現活動の中で、和太鼓や合唱活動にどのように取り組み、表現していったのか、またそこにはどのような発見があったのか、3グループの表現活動を取り上げ、「わらべうた」のメドレーに沿って、練習過程や演奏方法を分析した。その結果わらべうたの遊びに応じた身体の動きなどの表現を作り出し、「演奏技術」中心の音楽表現ではなく、遊びの音楽表現を根底にその創作表現を完成させた。また学生たちは、その過程で音楽の連携を意識し始め、人間関係形成力育成に繋がる「チーム力」への関心が高まっていく様子がみられた。

キーワード： 音楽表現 身体の動き チーム力

I. 研究の目的と方法

1. 研究の動機と目的

<保育者として考える音楽>

近年学生たちは、普段の生活の中で、色々な音楽を容易に検索し、好きな音楽を好きな時間に聴くことができる。自分専用の機器で映像と共に良い音響で聴くことが出来、自分の部屋や学校の休憩時間、駅のホームで聴くことがいとも簡単に出来るのである。またその音楽は自分の好きな画像で編集することもできる。聴くというだけでなく、視覚的効果を加えることで、音楽を多角的に楽しむ方法もあるのである。

そのような時代の学生たちに、演奏技術の習得が全てであるかのような音楽教育を行うことは、当然疑問であろう。徐々にピアノ技術を習得し、教員から「上手になったね」と褒められ、試験などで良い演奏評価を得ることは、その個人の学習成果の表れである。しかし学生自身が芸術性の良し悪しや満足度を自覚するにはその具体性がなく、私的感覚や個人の比較が評価の対象となる。また、音楽経験も少なく、読譜力が乏しい学生がその評価を適切に判断することも難しいといえる。つまり「良い演奏」「適切な演奏」という判断が学生自身

曖昧なのである。峯は次のように述べている。「前略—ふたことめには音程が悪い，ピアノがなっていない，発声がわるいと，わるいところばかり並べたてられたら，音楽に恐れをなすのは当たり前です。音楽の教育は幼児であれ大学生であれ，まず，いいところを評価することからはじまるものです。——後略」¹⁾

そこで，学生自身が理解できる「良い音楽」，保育に参加できる「音楽」について考えてみると，学生たちが保育者としての音楽を，如何に表現したいと考えているかを改めて確認する必要がある。保育者は，子どもにとって良い音楽，楽しめるような音楽との出会いを大切にしなければならないし，さらに子どもの表現しようとする気持ちを大切にできる保育環境を設定する必要がある。そしてそこでの音楽表現は，保育者も子どもも自然な生活経験と遊離した特別な技能の習得に偏らないよう配慮することが必要であると考え。また峯は「音楽は，養成課程でも保育労働でも，大きな部分をしています。そして悩みの大半は技術に関することです。音楽は技術でさええられてはいますが，技術そのものではありません。」²⁾と述べている。保育者自身が表現の表出を体験し楽しむことは，子どもの音楽環境をより豊かにすると考えるのは当然のことであろう。

今回の実践は，5領域の「表現」の視点から子どもたちに音楽の楽しさを表現し子どもたちと共有するために，どのような学びが必要であるのかを探求し，報告したい。

<社会性から考える音楽>

文部科学省の「生きる力」に匹敵するものとして，経済産業省は，2006年から「社会人基礎力」を提唱しており，それは「前に踏み出す力」，「考え抜く力」，「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されている。「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として，「基礎学力」「専門知識」に加え「社会人基礎力」を意識的に育成していくことを重要視している。³⁾

この中でも「チームで働く力」は，保育者として子どもに関わる専門性と職場や保護者との「人間関係力」に大きく関与するものである。

「チームで働く力」の内容には次のような項目が挙げられている。

表1

「チームで働く力」（チームワーク） 多様な人々とともに，目標に向けて協力する力	
発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
情況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
規律性	社会のルールや人との約束を守る力
ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

1) 峯陽著『保育のための音楽入門—うたいたいくなる子育てを—』p.157, 青木書店, 1981年

2) 峯陽著『保育のための音楽入門—うたいたいくなる子育てを—』p.147, 青木書店, 1981年

3) 経済産業省『社会人基礎力』2006年2月 経済産業省では産学の有識者による委員会（座長：諏訪康雄法政大学大学院教授）にて「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から成る「社会人基礎力」として定義づけ

これらの項目は、一般社会に適応するための重要事項であり、保育職にも当然当てはまるものといえよう。

現在小・中・高等学校では文部科学省の「生きる力」が第一に重要であろうが、大学や短大に関しては、目前に就職を控えており、当然この経済産業省の「社会人基礎力」に着目していくべきであろう。

そこで本学の音楽表現活動における指導が「チームで働く力」の育成につながっているものであるかについても分析していきたい。

2. 方法

上記の目的のために、次のような方法をとることとする。

- 1) 保育者や幼稚園教諭養成の音楽科教育のあり方を確認するため、学生の音楽との関わり方を5領域にある「表現」の視点から考察する。
- 2) 豊橋創造大学短期大学部幼児教育・保育科2年生を対象に、合奏・合唱・和太鼓による音楽表現の学習及び実践結果の分析をする。
- 3) 今回の和太鼓を活用した音楽表現活動の教育的意義を「社会人基礎力（チームで働く力）」との関係性から考察する。

II. 学生の音楽との関わり方

1. 個人の音楽学習について

学生たちの音楽経験は、ピアノや木管金管、ギターなどの楽器によるものがほとんどである。その他これら吹奏楽などの部活動経験者もいるが、その表現の価値の多くは、演奏の経験年数や技術レベルで評価される。また従来、音楽科学習においては、器楽や歌唱が主に行われてきており、その演奏のレベルや完成度に関心がいくのは当然のことであろう。さらに学生たちは、2年間という短い期間に、より豊かなピアノの技術修得を目指さなければならない。中には楽譜が読めない学生も増加しており、演奏技術の差がはっきりと表れてしまう。

一方、保育所保育指針の「表現」は、子どもたちの様々な体験を通してイメージを豊かにし、表現することの喜びや表現を楽しむ「態度」を培っていくことを目的としている⁴⁾。またそこでの体験は、人と共感し互いに尊重し合うことから、自分への自信や人への信頼感を得ていくことにも繋がると捉えられる。それに合わせて保育士養成課程の保育表現技術「音楽表現」についても、子どもの発達の知識や子どもの経験や表現活動と音楽表現を結び付ける遊びの展開を習得していくこと⁵⁾等が提示されている。子どもたちの音楽表現での発達を

4) 保育所保育指針表現（音楽）、幼稚園教育要領「表現」抜粋

5) 保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等改正について」（中間まとめ）『保育士養成課程等検討会』
2010年3月24日

促すのは、保育士のピアノ技術のみでないことは明らかであり、その保育士自身が音楽を表現することの楽しさやその方法を多く知っていることや、自信を持っていることが大切なのである。しかし、音楽体験による「自信」経験が乏しい学生たちが多く、さらにピアノ中心のみの学習内容になると、益々その達成感の経験値は低くなってしまふことであろう。

2. 音楽の楽しみ方

近年IT機器の目まぐるしい発展は社会を便利にしていることは言うまでもない。同時に直に人と関わる時間が減り、メールでやりとりすることの方を好む人の数は確実に増えているであろう。

またそれに関連して、音楽鑑賞は性能の良いヘッドホンで聴くことが出来、音楽の喜びを人と共有したり意見を交わしたりという行為が減っているのではないかと危惧することがある。

一方音楽の楽しみ方は多様化しており、音楽がコンピューターグラフィックなどとコラボレーションした作品は新しい時代に相応しい試みであり、音楽に対して親しみやすくなったと感じている人も多くいるであろう。実際関わりの薄いと捉えていたクラシック音楽が、親しみ易くなった、という声は学生の間からも上がっており、TVのインタビューなどでも放送されていた。このことは世代や経験などを問わず、色々な音楽を身近に感じる機会を得られるようになったと考えることが出来る。

このようにITが躍進する中、学生たちが地道な練習を積み重ね、より高度なピアノ技術を習得し、子どもたちに楽しい音楽や美しく音楽を伝えていくことは勿論意味のあることである。しかし瞬時に回答が得られ、聴きたい音楽がすぐに画面に飛び込んでくる豊かな時代に、学生個人のピアノ演奏技術の向上のみが音楽教育の内容を充実させる全てではない。つまり彼らが学習の成果として実感できる方法で音楽体験をし、表現することの自信や楽しみ、そしてその環境作りを経験することが必要なのではなかろうか。またそこには、集団の表現活動への取り組みの重要性も含まれており、「人間関係」「環境」「言葉」など音楽を通じた集団の質の向上を目指す所から、社会性への気付きを期待することもできる。保育者として子どもたちの「表現」に如何に関わっていくかは、この体験の必要性が大きく左右するはずであろう。

3. 動きを伴う音楽

保育学生たちにとっての音楽を、5領域の「表現」の部分に観点を置くと、分かり易い音楽表現とは、身体の動きが伴ったものが一番に挙げられるであろう。なぜならば、保育の中で行う音楽は、「音のある身体遊び」や「動きのある音楽」などの表現が子どもたちにとって受け入れやすいものであり、加藤も、「幼児たちは、音楽のリズムを体の動きと合わせながら感じ取る。また、体の動きとつなげながら音楽を表現することができる。」「幼児たち

は音楽と体の動きをつなげることをいわば本能的に行うことができ、そのことによって、音楽的表現が幼児たちの遊びの展開を支えることにつながっていく。」⁶⁾と提示しており、保育者がそのような表現を子どもたちと共有しようとするのは自然である。

また、中学校高等学校体育科のダンスの授業では、創作ダンスや現代のリズムに合わせたダンス学習を行うことが提示されており、これは幼児教育からの表現の流れを存続し、さらに細分化し学習・経験してきたものと考えられる。また近年の学生たちは、ヒップホップなどのダンスの流行により、歌と身体活動が一緒に表現されることにあまり抵抗がない。さらに今日ダンスの活動は多様化しており、プロの和太鼓集団などは、演劇やダンス、喜劇などを合わせた作品も発表している。これらのことを合わせて考えると、保育学生にとっては、演奏技術そのものを求めるばかりでなく、別の角度から表現をわかりやすく伝えるという方法を考え実践することで、自らの演奏に対する表現力も工夫することが出来るのではないかと思われる。このことは、次のアンケートの結果によって確認することができた。

<実習後の音楽体験についてのアンケート>

アンケート調査項目

調査日：平成24年6月28日

対象：豊橋創造大学短期大学部幼児教育・保育科2年生94名

アンケートは質問紙法で行った。質問項目は保育実習を終えて、子どもたちと音楽活動を行ったことについて、どのような感想を持ったのか、その意識について考えながら質問事項に答えていく形式を採った。

表2

① 子どもたちの前でピアノを弾いてみて普段の授業や学習と様子が違いましたか。			
A. 違う	B. 少し違った	C. 同じ	D. よくわからない
58	9	4	23
② ①の理由を書いてください。（以下は類似した答えをまとめたもの） [A., B.] と答えた人			
a. ピアノに余裕がなかったから、ピアノの鍵盤から目が離せないから。			
b. 緊張で手が震えてしまうから。			
c. 子どもの表情を確認することが出来ず、テンポなどが子どもたちと合わなかった。			
d. 子どもがいるといたないでは全く歌う雰囲気がちがうから。			
e. 自分が止まってしまうと立ち直ることがすぐできないので、子どもたちに申し訳ないと思う。			

6) 加藤富美子著「幼稚園の表現教育における生活・子ども・音楽の連環」
『音楽教育学の未来』p.150, 音楽之友社, 2009年

[C.] と答えた人

- f. 子どもたちに助けられ.普段通り楽しく弾けた. (5名)
 g. 子どもがいるといないでは全く歌う雰囲気がちがうから.
 h. 自分が止まってしまうと立ち直ることがすぐできないので, 子どもたちに申し訳ないと思う.

[D.] と答えた人

- i. ピアノは弾かなかった.
 j. 課題があったが, 弾けなかった(時間がなかった).

③ 手遊びなどの歌遊びと弾き歌いでは, どちらが子どもたちによりよく表現できましたか.
 手遊び (54) 弾き歌い (19) よくわからない (8) どちらもやっていない (13)

④ 手遊びは, 普段の学習と様子が違いましたか.

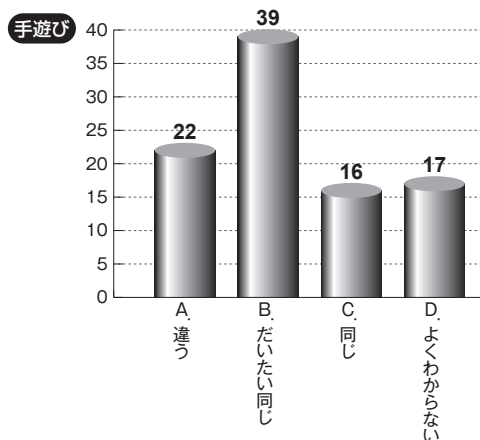
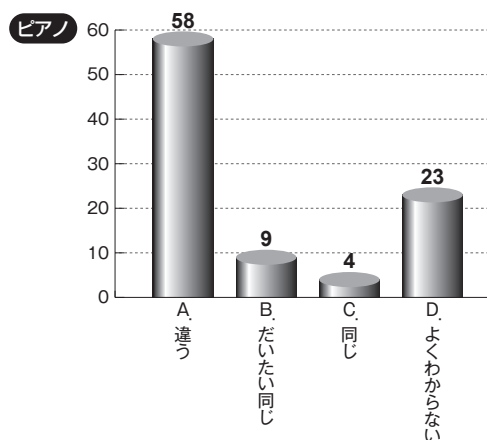
A. 違う	B. だいたい同じ	C. 同じ	D. よくわからない
22	39	16	17

⑤ ③で手遊びと答えた人は何故そうなのか書いてください.

- ・ピアノは人前で弾くと緊張するから.
- ・ピアノが苦手だから.
- ・手遊びは子どもたちの表情を見て, 保育をすることができるから.
- ・手遊びは子どもたちと一緒に合わせてできるから.
- ・手を一緒に動かすとテンポもリズムも取りやすく一体感があるから.
- ・子どもたちの表情に助けられて元気が出て頑張れる.
- ・手を動かして歌っていると緊張をあまりしないから

<分析>

①と③の「普段の授業や学習と様子が違いましたか。」では, 次のような違いが現れた.



このグラフからは学生たちのピアノ苦手意識がはっきりと読み取れる。大学に入学してから学習を始めたのは、手遊びもピアノも同じである。しかし人前で実施することの「自信のなさ」はピアノが圧倒的に多いことを示している。また②のd. とg. には、「子どもがいるといないでは全く歌う雰囲気がちがうから。」という同じ文言があり、学生の心情「自信」の違いが同じ言葉を両者に分けている。

アンケートからもわかるように、学生たち自身が音楽を楽しむということは、音楽に自信を持って保育をするということであり、保育者が自信を持って音楽を楽しんでいることが、子どもたちの心の豊かさや表現力を感じることができるようである。

そこで今回は学生たちが得意とする動きを伴う音楽表現を考え、その活動の意義を探って行きたい。特に最近の若者たちのダンスや音楽活動は、大勢の人数で歌を歌い、同じ動きのダンスやそのバリエーションで一生懸命に表現するグループ活動が流行しており、そのような動きに対しては馴染みがあるはずであろう。

保育者を目指す学生たちが、音楽的技術レベルの高いピアノ演奏や合唱合奏を行い、感動や美しさを伝える演奏パターンには限界がある。またそのような演奏を行うことが目的の全てではない。尾見は、技術レベルの高い演奏について「技術至上的で受動的な音楽観・音楽教育観の呪縛」⁷⁾と表しているが、今回の発表では、その呪縛を取り払い、一般の音楽や学校の音楽教育や音楽大学の専門音楽とは違う「保育者音楽、幼稚園教職音楽」に、如何に関わっていくかを考察実践する。また集団での音楽活動だからこそ学習できる「見せる音楽表現」（身体の動きと共にある音楽表現）から学生一人ひとりの成長を目指すことを目標とした。

Ⅲ. 授業実践の概略

授業は、2012年9月から11月24日に至るまで15コマと補充4コマ、豊橋創造大学短期大学部幼児教育・保育科の3クラス94人において筆者が実施した。以下授業実践の経過の概要を述べる。

1. 授業のテーマと選曲についての関係

この授業科目名は「音楽表現」である。先に述べたように学生たちが自信を持って成長し、子どもたちの表現を共有し、子どもたちがより豊かに表現していくことのできる音楽表現について学習するため今回の実践を行った。また、テーマは「歌い継いでいきたいうた」で、それは日本の伝統や文化を残していきたいという本学幼児教育・保育科の音楽教育のテーマの一つとしている。日本の伝統や文化といえは、「わらべうた」が挙げられる。

7) 尾見敦子著「ことばと音楽—保育者養成のための音楽の授業づくりの視点から」
『川村学園女子大学研究紀要 第3巻 第2号』p.115—133, 1992年 所収

わらべうたは、あそびうたといえるので、あそびに合わせて行う動きによってテンポやリズムが決まり、今回の「動きを伴う音楽表現」（身体の動きと共にある音楽表現）に合っていると考えた。

2. 保育者として学ぶわらべうた

わらべうたは動き・ことば・音楽の一体で表現されているものであり、遊びが発達に欠かせない子どもにとっては、もっとも自然な音楽のあり方といえよう。畑はわらべうたのメリットを7項目に分けてあげている。⁸⁾

- ①わらべうたは、母子のぬくもりをもっています。
- ②わらべうたは、遊びの中から生まれました。
- ③わらべうたには、遊びの動作がついています。
- ④わらべうたのメロディーは、少ない音と狭い音域でできています。
- ⑤わらべうたは本来無伴奏の歌です。
- ⑥わらべうたのリズムは、言葉のリズムや遊びの動作と、よくマッチしています。
- ⑦わらべうたは昔の古い歌ばかりではありません。

先にも述べた「動きを伴う音楽」で表現するに当たって、上記の②③⑥からわらべうたの実践効果が期待できるものと考えた。茂手木節子は、「はじめにわらべうたを」の中で「からだを動かしながら体験することは、かなり心の奥の方に働きかけることなのではないか。からだを動かすことなしに 頭だけで考えると表面的なものしか感じられないのではないだろうか。心や頭をゆり動かすためには ほんとうにからだをうごかさないとだめだ」と述べている。⁹⁾ このことは、子どもたちはもとより、現役の保育者などの講習会などを見ていると、音楽のイメージに合わせて身体表現を行うなどの場合、動きがすぐ現れる比率が多いことがわかった。下の図は一般の合唱サークルと現役保育者の、身体表現に反応する度合いを調査したものである。

質問事項：「音楽を聴きながら動いて（身体表現）下さい。」

（曲目は、ウィリアムL.ギロックの叙情小曲集の中の「ダイアナの泉」を使用。

これについては、全員が全く知らないと答えた）

表3 <注意>：動きの表現方法に関しては自由でレベルを問わない

		直に動いた	少し考えて動いた	全く動かない
一般（趣味で合唱）	26名	2（8%）	14（54%）	10（38%）
現役保育者	35名	18（51%）	17（49%）	0（0%）

8) 畑玲子・知念直美・大倉美代子著『幼稚園・保育園のわらべうた遊び春・夏』1994年、『幼稚園・保育園のわらべうた遊び秋・冬』p.11-18、明治図書、1995年

9) 茂手木節子著『はじめにわらべうたを』p.7、全音楽譜出版社

現役保育者は動きを容易に行うスタイルが身に付いているため、全く動かないというのは0であったが、一般においてはそれが全体の41.6%を占めている。

次に幼児教育・保育科の学生たちに同じ調査を行った。

表 4

	直に動いた	少し考えて動いた	全く動かない
幼児教育・保育科24名	2 (8%)	17 (71%)	5 (21%)

この結果は、保育者志望者たちの身体の動きの経験値が出たものであるといえよう。このような動きの体験の積み重ねは、子どもたちの表現を理解し豊かにするものであることがわかる。

これらのことから、わらべうたを単に演奏するのではなく、動きを伴ったわらべうたを演奏で表現することとした。

3. 演奏方法

わらべうた実践は、小島が以下の4つのパターンを取り上げている。¹⁰⁾ 今回の発表は日本伝統音楽の学習が第一の目的ではないので、その中の「楽曲演奏型」を実践方法として用いる。

「楽曲演奏型」とは、わらべうたを合唱・合奏曲に編曲し、わらべうたを教材として演奏のための技能を養うことが目的となる。わらべうたのメロディーの2部3部合唱や掛け合いやカノン、ユニゾン、交互唱へと発展した編曲がされているこれらの教材は、誰もが知っているシンプルなメロディーから、それらの技法によって様々な響きに変化することを経験できる。また学生たちの中には、吹奏楽の経験者や難易度の高いピアノ演奏力を持っているものが数名いたことから、合唱・合奏（吹奏楽）を組み合わせた創作の演奏を行っていくこととした。しかしこれらの演奏の内容（楽曲演奏型）だけについていえば、わらべうた本来の目的の一つとされている社会性の育成は期待できないであろう。小島はわらべうたの社会性について、「わらべうたは集団でおこなうことが多い。わらべうた教育では、生きる力として必須の社会性の育成が期待できる。とりわけ、わらべうたは身体によるコミュニケーションの具体化されたものであるから、身体的コミュニケーション力が育つ。——中略——身体的コミュニケーションによりお互いの身体的作用が共有でき、自他を意識できるようになる。」¹¹⁾ と提示しており、身体の「動きを伴う」実践が必要であると考える。

今回の動きを伴う音楽の表現が、演奏の方法や曲目の構成、楽器の役割などから、どのような表現を作り上げていくのかは、コーディネーターでもある教員の影響は大きい。

10) 小島律子著「学校音楽教育におけるわらべうたの再考」『大阪教育大学紀要 第v部門 第58巻 第1号』所収, p.43—55, 2009年

11) 小島律子著『学校における「わらべうた」教育の再創造—理論と実践—』p.29, 黎明書房

<曲目構成>

学生たちは3つのクラスで話し合い、以下のわらべうた曲を使うことにした。またこれらをメドレー形式にて演奏し、演奏の表現内容は勿論のこと、各曲の流れをどのように連携（動かす）していくのか、これも「動き」として捉えその意義を後に考えていくこととする。

[使用曲]

わらべうた：もういいかい、ひらいたひらいた、あんたがたどこさ、なべなべそこぬけ、かごめかごめ、ずいずいずっころばし、通りゃんせ、せっせっせのよいよい

<楽器について>

今回の発表にて可能である「動きを伴う音楽」の表現方法には、3パターンある。一つは動き（振り）を付けて歌を歌うことである。これらの動きは身体あそびうた¹²⁾と呼ばれており、身体の一部または全身を使って遊ぶうたのことをいう。

二つめは楽器のメロディーに合わせて動く、3つめは体を動かして演奏する楽器を使う。この3つめの楽器は日本伝統音楽の「和太鼓」を取り上げることになった。和太鼓は、現在数多くの団体で活動されているが、幼稚園保育園などで取れ挙げているところもあり、学生たちの関心度が非常に高いといえる。和楽器演奏の導入としてわらべうたを使うという方法は、2000年になると傾向が強くなっており¹³⁾、和楽器演奏技能を育てる手段として用いられている。

[使用楽器]

フルート（1）、クラリネット（1）、アルトサクソ（1）、トランペット（2）、ホルン（1）、トロンボーン（1）、ピアノ（1） 吹奏楽経験者等8人

[使用楽器]

和太鼓（クラスで太鼓の数を調整している）
平太鼓（23） 宮太鼓（5）

<演奏の内容>

わらべうたを演奏するにあたって、次のような演奏を計画した。合唱・合奏と和太鼓でそれぞれの曲を創作表現しようというものである。

12) 岩井政浩著『わらべうた その伝承と創造』p.210、音楽之友社、1988年

13) 小島律子著「学校音楽教育におけるわらべうたの再考」『大阪教育大学紀要 第v部門 第58巻 第1号』所収、p.43-55、2009年

表5

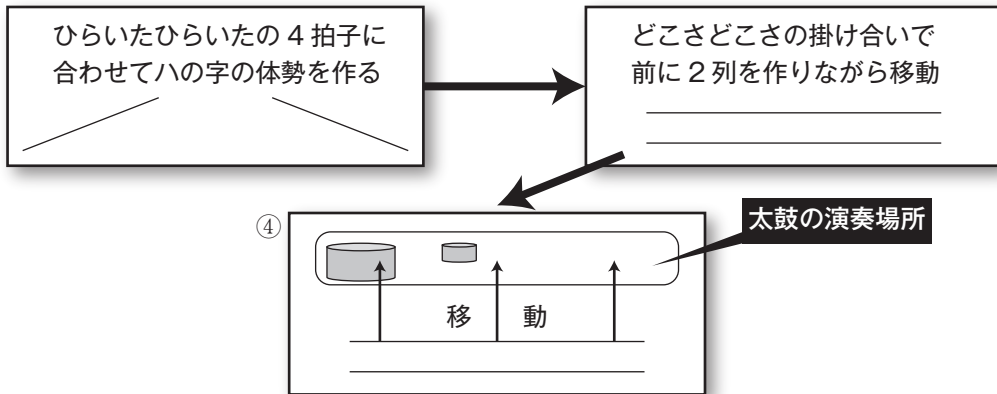
曲 目	演奏手段	動きについて	動きの種類
①もういいかい ②ひらいたひらいた	吹奏楽 吹奏楽	・ひらいたひらいたの合奏が始まったら、この曲に合わせて合唱メンバーは、舞台に出る	
③あんたがたどこさ	合 唱 (2部) ピアノ	・身体（全身）あそびを付けて、2部合唱行う。「どこさどこさ」の繰り返しのメロディーを歌いながらフォーメーションの移動を行う。	
④あんたがたどこさ	吹奏楽	・楽器の演奏のリズムに合わせて合唱の位置から太鼓の位置へ移動する。	
⑤あんたがたどこさ	和太鼓	・「あんたがたどこさ」のリズムを元にリズムのバリエーションを演奏する。 和太鼓で全身あそびを表現する。	
⑥かごめかごめ	アルトサクソ ピアノ	・あんたがたどこさの演奏が終わり、かごめかごめで次のクラスと入れ替わる	
⑦ずいずいずっころばし	吹奏楽と 和太鼓	・最初にずいずいずっころばしのメロディーを吹奏楽で提示し、太鼓はその合いの手を行い、吹奏楽と和太鼓の掛け合いを行う。 ・身体（指）あそびを太鼓で表現する	
⑧ずいずいずっころばし	吹奏楽	・吹奏楽のずいずいずっころばしのメロディーでクラスが入れ替わる	
⑨なべなべそこぬけ	和太鼓	・なべなべそこぬけのリズムを元にバリエーションのリズムを演奏する	
⑩通りゃんせ	吹奏楽	・演奏に合わせて移動し、合唱のフォーメーションを作る	
⑪せっせっせの よいよいよい、 なべなべそこ ぬけ	合 唱 ピアノ	・歌いながら手遊びや移動を行い常に遊びをイメージした身体（全身）あそびを付け2部合唱する	
ここからは全員合唱			

<演奏の中での動きの種類>

●合唱合奏での動き

動きの種類[A][C][F][H]は、先の「動きを伴う音楽」の一つ目と二つ目の合唱や合奏に合わせたテンポやリズムでの移動の動き(ex.①②④)、合唱を行いながらその歌に合う身体あそびうた(ex.③)の動きを示している。

例：①②について



●和太鼓での動き

動きの[B][E][G]は、3つ目の太鼓の演奏前・演奏・演奏後の動きである。和太鼓の演奏前と演奏後の動きにはバチの扱いがあり、バチを持ったり置いたりする「所作」である。この動きは日頃全く取り入れることのない動作であり、「和太鼓」という伝統楽器の持つ作法のリズムがある。また掛け声や息遣い、体の動きなどでテンポやリズムを作っていく要素が強く、このチーム力を要する動きは学生たちの難題となった。

さらにそれぞれの曲(クラス)のモチーフから、バリエーションをいくつか創り、自分たちの和太鼓リズムアンサンブルを行ったが、楽しさや勢いなど学生たちの思うような表現ができないという不満が出始めた。

<わらべうた表現の和太鼓演奏について>

学生たちの和太鼓経験率はピアノ経験率よりも明らかに低い。当然その技術習得の難しさは、取り組んでみれば、誰もがすぐ実感できることであろう。しかし見た目、叩けば音が鳴るという入り込みやすさが学生たちのやる気を維持してきた。

和太鼓の練習を重ね、それぞれのクラス独自のリズムを覚え、その形が見えてきたとき、同じわらべうたのリズムを使っているにもかかわらず、非常に不明瞭で表現の内容が伝わらないといった問題が出てきた。学生たち自身も思ったように表現できないことを問題視するようになった。ここでその時の学生の意見を聞き取り調査した。

学生へのインタビュー（32名）

- ・叩いていてつまらない
- ・楽しく叩くということをどうしたらよいかわからない
- ・音が揃わないとやる気がなくなっていく
- ・和太鼓だけが他の演奏と別になっていて浮いている気がする
- ・抑揚が伝わらず全部同じ演奏に聞こえてくる
- ・和太鼓の演奏法を知らないから不安
- ・最初は太鼓がかっこいいと思っていたけど、全体の演奏の中の何の役割があるのかわからなくなってきた
- ・子どもたちに何が伝わるのか自信がない
- ・もしかしたらこの太鼓のリズムをカスタネットで叩いた方が、子どもがよくわかるのではないかと思う
（その他は類するものは省略）

ここでは、学生たちの和太鼓に対する経験の無さや、和太鼓に対して持っている固定概念が、演奏に対する不安や疑問を招いていた。しかしこの問題は他の楽器においても同じように起こる問題であり、先に述べたピアノ学習の問題点と同様のことと思われる。筆者は、特に和太鼓の技術的な欠点を指摘する前に、楽しく取り組めるための議論を行うよう提案した。

そこで、学生たちは「和太鼓」について話し合いを行い、問題解決へ向かって多くの意見を出し合った。テーマを3つに絞り表現方法の改善を目指した。

テーマ1：わらべうた和太鼓で何を伝えたいか。

- ・みんなで遊ぶ楽しさ
- ・人と一緒にリズムを奏でる楽しさ
- ・みんなですることの力強さ

テーマ2：太鼓をどうしたら楽しく叩くことができるか。

- ・わらべうたの遊びを考えて動いてみるのはどうか。
（隣の子の太鼓叩く、バチを隣の子と合わせる、動きのパターンを工夫する）
等
- ・太鼓を叩きながら歌をうたってはどうか、わらべうたなのだから。
- ・掛け声をかければみんなのテンポが揃い、元気が出るのではないか
（バリエーションリズムの演奏時など）

テーマ3：和太鼓演奏のバチの扱いの動作の違和感（所作）をどうするか

- ・和太鼓の所作はバチの用意をするため、叩いている周りの動作に集中して全員がその動きを合わせ（バチの持ち・置きは、リーダーの動きの気配を感じてピタリと合わせるといった行為）、その動きは音楽にも合わせていく方がいいと思う。
- ・所作の間も楽器での演奏を続け、そのテンポに合わせて動くことで、そのまま演奏につなげることが出来る。

テーマ1の方法が2の意見で述べられており、話し合いを通して、わらべうた本来の表現

の目的を考えるようになり、動きを伴った創作和太鼓表現が始まった。(テーマ2の動きやフォーメーションについては今回は触れない)

テーマ3については、全体の演奏の流れを考える意見が出始め、わらべうたをいかに表現していくかという考えの元で和太鼓表現を考えようとしており、全体のテンポやリズムに対しての学生たちの意識が高まっていることが感じられるようになった。

このように、和太鼓を学んでいるが、和太鼓演奏の演奏技術の習得を目的としておらず、特に今回の発表に関しては、その視点を変えることで学生たちの音楽表現目的が明確になっていった。「わらべうたには楽器はいらないのではなくて、楽器が加わることでそのあそびをどう楽しくできるのかが課題である」¹⁴⁾ という峯の言葉を借りるとすると、音楽の視点からどのような表現活動を行えば、わらべうたあそびの目的や意義を伝えることができるのか、その手段の一つをここで見つけることができたのではないかと考える。当然動きと共に演奏を行った和太鼓演奏は、それが無い状態の時よりも生き活きとしており、表現力や技術レベルも成長がみられる演奏となった。それは次の学生の言葉からも読み取ることができる。

<学生の感想>

- ・歌をつけたら、遊びの世界がみえてきて叩きやすくなった
- ・太鼓の所作を特別に思っていたので、音楽にのって所作をし始めたら、太鼓の演奏に自然に入ることができた。
- ・練習を始めたころは、ただ単に叩いていたけれど、子どもたちの遊びをイメージして動きをつけたら、動きをつけることでみんなとの一体感が湧いてきた
- ・リズムが揃っているのかが音で判断できないので、動きをつけたら自信を持って叩くことができた
- ・移動で歩いている時、歌をうたって体を動かしている時、動きを付けて和太鼓を叩いている時の全部がテンポやメロディー、リズムで繋がっていることがわかってきたら、和太鼓が特別な楽器と思わなくなっていた

他

IV. 集団での表現活動の意義について

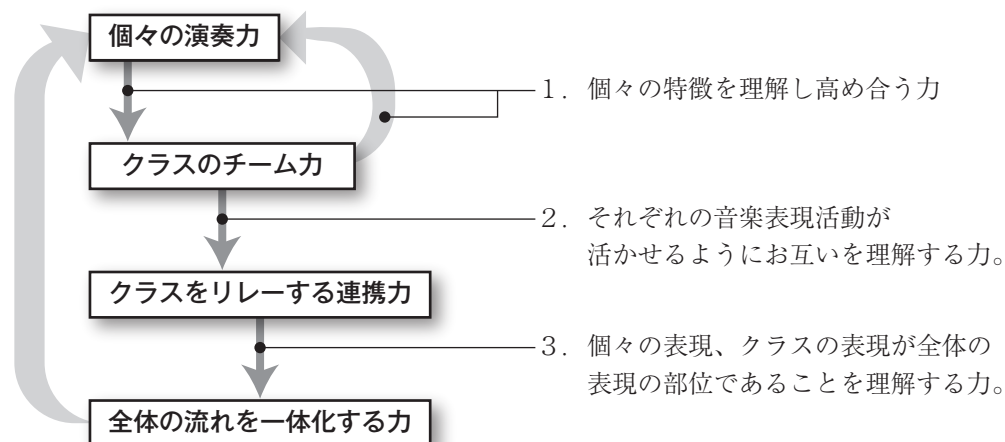
1. 段階ごとの人との関わり方

学生たちが行う集団の演奏活動は、音楽的能力に長けているものと苦手意識があるものとの、ともに成長できることが望ましいと筆者は考えている。

今回の学生たちの話し合いや練習の過程には、「みんな」「一緒に」「人と」「子どもたちの」などの言葉が多く出てくるようになっていた。これについて学生たちは、より分かり易い音楽表現方法を考えていく過程で、3段階においてその意志が芽生えていったように考えられる。これらの経緯を右の図で表してみる。

14) 峯陽著『保育のための音楽入門—うたいたいくなる子育てを—』p.136, 青木書店, 1981年

表6



1. については、次のような事例がある。（インタビュー調査）

●リズム遊びが苦手なAさん

学生Aさんは、リズム感がなくピアノも大変苦手である。和太鼓を叩き始めた時は周りの動きについていけず、とても不安な様子であった。しかしAさんは段々と自分の前で叩いているBさんを観て叩くと叩けることに気が付き、目で音を感じることを思いついた。その証拠に中盤まではBさんが欠席をした時にわからなくなってしまった。

●音楽が得意なBさん

Bさんは日頃から色々な表現力があり大変器用である。この和太鼓演奏は自分にとって簡単と感じられ、既に理解できていると思っているので、やる気も停滞ぎみであったが、Aさんが必死でついて来ようとする態度を見て気持ちが変わったという。Aさんに対し分かり易く丁寧な動作で演奏し、はっきりと表現しようと思ったという。またより大きく見せることでAさんに伝えたいと思っていたことが、結局は自分の思い切った表現に変わり、上達していたことに気付いた。

このように音楽的レベルの違う者同士が、触れたことのない和太鼓を媒体にして、自らの表現力を高めていった様子は、この集団活動が個々の成長に有効的であることを示しているといえよう。

また、2. と3. については、連携や総合力を意味するものであるが、音楽的立場からも表5の動きの⇒A□C□F□Hと↓B□E□Gで連動性を保つような演奏方法を用いており、学生たちの動き（音楽の流れ）の意識が現れていることがわかる。

2. 活動から考える社会性

今回の創作による音楽表現活動は、個々の学生たちの技術習得や仲間との協調性の成果の発表に留まっているわけではない。音楽表現に取り組んでいくその過程には、人間関係力が

必ず必要とされていた。学生同士の感情・教員と学生との意見交換・音楽の流れと人の動き方・演奏を聴き合う力・音楽全体に対する個々の関わり方等、今後の社会での適応力への基礎を気付くためのテーマが含まれている。中でも表6は、個人から広がるチーム力や全体から個を振り返る環境が、音楽表現活動の中に存在している。

このことは、先に述べた「社会人基礎力」の「チームで働く力」（チームワーク）「多様な人々とともに、目標に向けて協力する力」の育成にも関与していると考えられる。それは音楽表現という色々な演奏法を通して間接的にまた直接的に学んでいることなのである。

そこで今回の活動過程の主なテーマを、筆者の観点から先の表1「チームで働く力」に当てはめてみることにする。

		学生の活動
発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	個々の演奏(表現)への取り組み
傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	2部合唱 和太鼓の合奏
柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	意見交換 役割分担
情況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	
規律性	社会のルールや人との約束を守る力	演奏のテンポ 自分の演奏や動作の役割を守る(演奏の流れを止めない)
ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	

このように、今回の活動は、「チームで働く力」の6つの項目のうち、4つに該当すると考えられ、今回の活動は社会性を育むための学習の一つであるといえよう。また該当しないと判断した項目については、今後さらに活動の中から問題点をとり上げ考察していきたい。

おわりに

今や少子化という言葉は、子どもたちのまた学生たちの最大の問題点と言えよう。必要とされるべき家庭教育や異年齢の関わり、集団での関わりが危惧され続けている。学校教育に課せられる問題は山積みであり、社会への窓口である大学教育についてはその職制も付随してくることから、社会性と専門性の両者の成果が求められる。

その中で音楽表現という専門性が、人間形成力に繋がるような取り組みや、子どもたちの豊かな発達のための音楽教育について、未経験な学生たち自らがその実感と成果を体得していく必要がある。今後「社会人基礎力」を根底に、さらに音楽表現から考える表現活動を積極的に行っていきたい。